

後期：現代聖書学の諸問題

オリエンテーション

- | | |
|----------------------------|-------|
| 1. 創造論 | |
| 2. 一神教 | |
| 3. 契約思想 | |
| 4. 神殿神学・知恵文学 | 11/2 |
| 5. 預言 | 11/9 |
| 6. 研究発表：侯 | 11/16 |
| 7. 研究発表：張 | 11/30 |
| 8. 研究発表：齋藤 or 南 | 12/7 |
| 9. 研究発表：齋藤 or 南 | 12/14 |
| 10. 研究発表：金、岡田 | 12/21 |
| (11. 研究発表：山下 | 1/4) |
| 12. 終末論・史的イエス | 1/11 |
| 13. イエスの譬え | 1/18 |
| 14. 初期キリスト教と女性 | 1/25 |
| 15. パウロと政治神学 → 火曜日の「聖書演習」へ | |

<前回>一神教**(1) 一神教の宗教史**

一神教の位置：神の信仰の多様な形態の一つ（宗教はさらに広い）

唯一神教（絶対的一神教、排他的的一神教）／拝一神教／多神教

イスラーム、ユダヤ教、古代イスラエル宗教、キリスト教

1. 古代オリエン特宗教史（エジプト、メソポタミア）
2. 聖書：神話時代（天地創造からノア）→族長時代（アブラハムから出エジプト）
→歴史時代1（12部族連合から王国形成）→歴史時代2（王国崩壊以降）

(2) 古代イスラエル民族の宗教

3. 神話時代から族長時代：「イスラエル民族」という理念の成立以前。
後にイスラエルを構成することになる諸部族の核が徐々に形成され、次第にカナンへ移動。相互に分離した諸部族と部族宗教（部族神・守護神）。古代オリエン特の諸民族と類似の宗教文化を保有（?）。移動式聖所（幕屋・箱）。星神信仰（山に顕現する）
4. 12部族連合時代：自立的な諸部族の連合体→「イスラエル民族」という理念の成立。
士師時代、独立した地方聖所（シケム、シロ、ベテル、エルサレム）と祭儀を保有。
6. 拝一神教としての古代イスラエル宗教
古代イスラエルの宗教は、他民族・他部族がそれぞれの神々を信じていることを前提にして、自らの神（ヤハウエ）への信仰を語っていた。
拝一神教：多神教的宗教文化を背景に、そのうちの特定の神への信仰を告白する宗教。
7. 王国形成と宗教の中央集権化（エルサレム神殿・神殿神学）＝一神教傾向の強化

(3) 一神教と多神教

8. 拝一神教（諸集団の統合原理）→唯一神教（やや人為的な面が強い）
9. 一神教と多神教とは連続している。
一神教と多神教、あるいは宗教（一般概念としての）は、近代以降の成立。
10. 多神教も拝一神教的であり得る。あるいは、その方が自然か？
11. 宇宙・世界観（理論的観念的な包括性）と信仰（個別的で具体的・限定的）
12. 一神教と多神教、あるいは宗教（一般概念としての）は、近代以降の成立。

（４）ユダヤ教と唯一神教

13. 古代イスラエルの歴史において、王国の分裂からバビロン捕囚（AD.597/587/583）へ至る過程は、民族滅亡のプロセスであった。古代イスラエル宗教は、この歴史的現実に対して、それを神に対する民族の背き・反逆と、民族に対する神の罰として解釈し、その上で、民族の再生（神に帰ることによって民族を再建する）を展望しようとした。

これは、古代イスラエルの宗教の純化という仕方で行われ、ここに、ユダヤ教は成立する。ユダヤ教的な唯一神教。バビロン捕囚から帰還した者たちを中心に宗教と民族の再建を試みる。ネヘミヤ・エズラの改革、宗教改革。

14. ヤハウエの唯一性の主張

（５）一神教は排他的か？

15. キリスト教においても、異教は単に無価値ではなく、それ自体の存在意味を認められるとも言える。イエス誕生についての多神教に証言。
16. キリスト教：
 - ・最初期（キリスト教以前）：ユダヤ教イエス派、ユダヤ教的唯一神教
 - ・初期キリスト教（キリスト教の形成期）：ヤハウエとイエス、そして聖霊
→ 三位一体
 - ・古代キリスト教会：天使、殉教者、聖人、マリアなどの仲介的存在者。
→ 多神教的？

3. 契約思想

（１）契約思想の源流と類型

1. 古代オリエントにおける契約思想
 - ・マリ文書(Mari-text)：紀元前約 1800 年頃（か、やや後）、ユーフラテス川中流の古代都市マリ（アブル・ケマル）の近くのテル・ハリリの王の記録集。法律のテキスト、経済のテキスト、王の外交文書。
「ヘブライ人」という名称の人々が古代オリエント全体にいた。バビル。いろいろな種類の労役を引き受けていた。「これは多分、特定の法的・社会的地位に対する一定の名称である」（ノート、58 頁）。
 - ・ヒッタイトの契約文書（紀元前 1400-1200）、モーセ時代
宗主と隷属民の契約（宗主－属王）
 - ・「契約は古代オリエントの社会生活の基盤」（石田、21 頁）
2. 「日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。」（創世記 15:17）
3. 契約の類型

- ・ アブラハム系列：「神が責任を負う」

アブラハム契約、ダビデ契約（サムエル下 23.5、3.9、詩編 89.28-29）、ノア契約、

- ・ モーセ系列：「イスラエルが責任を負う」

シナイ契約・十戒、ヨシュアの契約（ヨシュア 24）

・ この二つの契約の統合としての「イスラエル」：「神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとの遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名／これこそ、世々にわたしの呼び名。」（3.15）

（2）契約思想

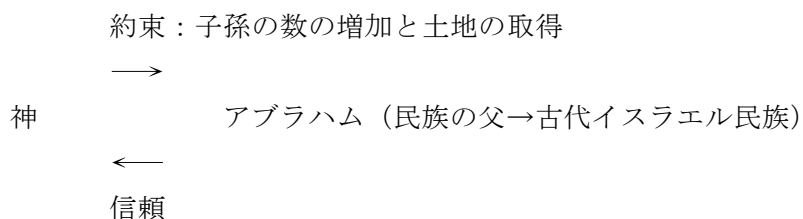
4. 「神－人間（共同体・民族→個人）」の関係＝契約関係、人格関係における神（人格神）

- ・ 契約から創造へ：契約をめぐる思想は、旧約聖書の思想的核心を構成するものであり、創造論も契約思想に基づくものとして解釈することができる（フォン・ラートの学説）。

旧約聖書の記述の順序で言えば、創造から契約へと物語は展開しているが、思想形成の順序では、契約から創造への展開を指摘することができる（聖書学の成果）。

5. 契約の構造：「約束－信頼」 → 責任性・違反への罰則・人格的な関係

アブラハムと神（主＝ヤハウェ）との契約（アブラハム契約）は、旧約聖書の契約思想の原型と言えるものであるが、それは次のような構造になっている。



- ・ 古代イスラエル宗教は典型的な民族宗教である。

神は民族の反映を約束し、民族はこの神への信頼において統一される。神と人間との契約関係は、人間相互の関係の基本型であって、契約は古代イスラエルの基盤をなす。

Q：古代イスラエル宗教や現代のユダヤ教と同様に、民族宗教に分類される日本の神道では、神と人間との関係は、どのように規定されているだろうか。それは、日本社会においてどのように反映されているだろうか。

血縁・地縁という自然の絆

6. 「信頼」という要素とその根拠。

神の履歴：旧約聖書を創造物語から始めるという構想。創造論は古いクレドの「前面への拡張建築」と解することができる。

7. 契約の起源・由来（創造論）と契約の結末・成就（終末論）

約束は成就を含意する→実現のプロセス→聖書の歴史観（救済史）

約束はその実現が展望されるときにのみ、真の約束となる。この約束の成就・実現こそが、歴史の目的としての終末に他ならない。こうして、契約を中心に、前後に

伸びた時の連関、つまり、創造から終末に至る歴史的連関がその全貌を現すのである。

8. 契約と社会・法

・十戒（出エジプト 20.1-17）→「契約の書」（20-23）

宗教法（神と人間）から一般法（人間相互）へ

偶像の禁止・祭壇建設の規定：20.23-26

奴隸法：21.1-11 死刑法：21.12-17

傷害法：21.18-36 財産法：22.1-17

社会法：22.21-27 訴訟法：23.1-9

安息年・日、三度の祭りの規定（23.10-19）

・「イスラエルの民を互いに結び合わせている絆は、神がご自身をイスラエルに結び合わせているのと同じ絆だった」、「そのような兄弟姉妹どうしの契約は、イスラエル全体が神が結んだ契約関係に基礎づけられていたのである」（トーランス、38）

9. 契約：法から精神へ

・法の実体的基盤が喪失するときどうなるか。→ 実体変化

エレミアの新しい契約（31.31）、「心にそれを記す」（31.33）

（3）関連テキスト

<創世記9章>

9 「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。10 あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。

<創世記15章>

1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。「恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

17 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。18 その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

<参考文献>

1. G・フォン・ラート 『旧約聖書神学 I・II』日本基督教団出版局
2. M.ノート 『イスラエル史』日本基督教団出版局。
3. 関根正雄 『古代イスラエルの思想家』講談社学術文庫。
4. 関根清三 『旧約聖書の思想 24の断章』岩波書店。
『旧約聖書と哲学 現代の問いの中の一神教』岩波書店。
5. R.レントロフ 『モーセ五書の伝承史的問題』教文館。
6. 船水衛司 「契約」『聖書学講座 第二巻』日本基督教団出版局、27～66頁。
7. 石田友雄 『ユダヤ教史』山川出版社。
8. トーマス・F・トーランス 『キリストの仲保』キリスト新聞社。